

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：34517
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24520379
 研究課題名(和文) グリム童話を中心とするドイツ伝承文学におけるジェンダー

 研究課題名(英文) Gender in Grimm's Fairy Tales and German Folk Tales

 研究代表者
 野口 芳子 (NOGUCHI, Yoshiko)

 武庫川女子大学・文学部・教授

 研究者番号：30164685
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：グリム童話出版200年祭、日本ジェンダー学会大会、日本独文学会大会などでシンポジウムを開催し、グリム童話やドイツ伝説集における父親像、母親像、家族像を浮き彫りにした。その成果を9本の学術論文や3冊の著書にして出版した。

ドイツ・カッセルのグリム兄弟協会大会で招待講演を行い、リトアニア国ヴィリニウス大学の国際口承文芸学会で発表した。発表は評価され、国際的学会誌「Fabula」56号への掲載が確約された。日本におけるグリム童話受容は英訳からの重訳により、ビクトリア朝英国のジェンダー観や道徳観の影響を受けていたことを立証した。明治期日本の西洋化は技術だけでなく、道徳にも及んでいたのだ

研究成果の概要(英文)：We held three symposiums for the two-hundred-year Anniversary of the publication of Grimm's Fairy Tales, annual meetings of the Japan Society of Gender Studies and the Society of German Literature. We thoroughly analyzed the images of father, mother and family in Grimm's Fairy Tales and German Legends. We published nine academic papers and three books as a result of our research.

I gave a basic lecture at the annual meeting of the Brothers Grimm Society in Kassel and a speech at the meeting of the International Society for Folk Narrative Research in Vilnius, Lithuania. My speech was recommended for publication in the prestigious Journal Fabula Nr.56. The early publications of the Grimm's Fairy Tales in Japan had many influences from the gender and moral standards of Victorian England, because many translations were from English texts and not the German original. The westernization of Japan in the Meiji-Era was not limited to technical fields but also included moral education.

研究分野：ドイツ伝承文学

キーワード：ドイツ ドイツ伝承文学 ジェンダー学 グリム童話の父母像 ドイツ伝説集の父母像 学際的研究
 外国文化受容論 異文化比較

1. 研究開始当初の背景

グリム童話研究のジェンダー学的考察はグリム兄弟が改変した箇所のみ焦点が当てられ、性別役割分担が強調された近代の価値観が盛り込まれたものであるという指摘が、主としてアメリカの研究者によってなされていた。しかし、後期口マン派に所属するグリム兄弟は古代や中世を賛美する傾向があり、メルヒェンを文学、歴史学、法学の3要素を兼ね備えたものと見ていた。メルヒェンの中には近代だけでなく、女性も生産者であった中世のジェンダー観も秘められているはずである。そこでこの問題について、徹底的に調べてみる必要があると考えたのである。

2. 研究の目的

1) 本研究の目的はグリム童話を中心とするドイツ伝承文学におけるジェンダーを文学、歴史学、社会学、民俗学などの諸分野から学際的に研究することである。

2) 伝承文学には編者が所属する近代、語り手が所属する古代や中世などの価値観が現れている。ここでは家族像に焦点を当ててその価値観をジェンダーの視点から検証していく。

3) グリム童話を受容する際、初期の邦訳はドイツ語からではなく、英語からの重訳である。翻訳段階で行われた改変はどのようなジェンダー観に基づいたものであったかを、日本、英国、ドイツの社会的文化的背景から読み解いていく

3. 研究の方法

1) カッセル・グリム兄弟協会大会招待講演で、野口は数字が持つメタファーをジェンダー学の視点から読み解く。性別に対する社会的思い込みを検証するジェンダー学は、思い込みを覆す視点として様々な学問に取り入れることができるものであることを示す。

2) 「グリム童話出版200年祭」でシンポジウムを5つ開催し成果を多くの人と共有する。

3) 2学会でのシンポジウムでは父親像と母親像を中心とする家族像に焦点を当てた考察をする。ジェンダー学会ではドイツだけでなく、英国、中国、日本の場合も考察対象とする。

4) 明治期の邦訳は英語からの重訳が多い。使用された英訳本を特定して、英語版での改変を調査することによって、ヴィクトリア朝英国の価値観による改変が否かを検証する。

4. 研究成果

1) 研究の主な成果

(1) 国内シンポジウム発表

グリム童話200年の歩み 日本とドイツの架け橋として」(2012年10月20日)

基調講演でラウアーは「文字から図像へ19~20世紀における『子どもと家庭のメルヒェン集』挿絵の歴史」で、挿絵をジェンダーの視点から解読する。溝井は「メルヒェンの世界観・伝説の世界観 変身談を中心に」で、伝説とメルヒェンにおけるジェンダー観を変身談に焦点を当てて考察する。メルヒェンは変身に必ずしも魔法を必要としないが、伝説は悪魔と契約した人々(魔女、人狼)の魔法を必要とすると分析する。野口は「明治期における『グリム童話』の翻訳と受容 初期の英語訳からの重訳を中心に」で、英語訳から重訳された初期の邦訳グリム童話や英語教科書で取り上げられた話には、ヴィクトリア朝英国の影響が多く見られると指摘する。竹原は「『グリム童話』と比較民俗学」で、グリム童話以降、世界各地で伝承文学が収集され、改変から社会や時代の価値観が読み取れると主張する。(シンポジウム発表は著書『カラー図説 グリムへの扉』(勉誠出版 2015年5月)として出版された。また読売新聞(2012年11月22日朝刊16面)で紹介された。

グリム童話刊行200年記念シンポジウム(2012年10月25日)

「グリム童話とジェンダー 文学・図像・音楽に見る家族像」では、と同テーマでラウアーが基調講演をする。溝井は「解雇された兵隊と近世の家父長制」で、貧しくて結婚できず家族を作れない男性(除隊兵) 家父長になれない男性のジェンダー問題を考察する。金城は「『ヘンゼルとグレーテル』から見る家族像」で、現在ドイツで出版されている絵本やアニメに描かれている家族像について考察する。グリム兄弟は悪い存在を実母から継母に変更し、経済力がない父親を優しい存在に改変している。この改変は現代でも踏襲されている。山本は「オペラにおける『ヘンゼルとグレーテル』 ジェンダーの視点から」で、子どもを森に追いやるのは、仕事を怠けたことに対する母親の体罰に変更されているという。悪行の首謀者を父親から継母に変更することにより、近代家族の父親に対する肯定的イメージを死守している。竹原は「グリム童話とヨーロッパ民間伝承にみる『白雪姫』のジェンダー観」で、ヨーロッパ全体に広がる「白雪姫」では、王子秘密結婚型、重婚型、重婚解消型の話が多いが、グリム童話では一夫一妻制の王子結婚型になっていると分析する。野口はグリム童話「白雪姫」の初稿から決定版までの変更を調査し、本当に悪かったのは后ではなく、後継者を産まない后を責めた王ではないかと推測する。初稿では姫を救うのは王による呪術(四隅に縄を張る)である。法であり鏡である Spiegel に最も schoen(美しい、豊穡な)のは誰かと繰り返し聞く后は、後継者を産んでいない自

らの地位の危うさを自覚し、娘を父親から遠ざけたのであろうと解釈する。

神戸新聞で3回(2012年10月29日、31日、11月20日朝刊23面)紹介された。

日本ジェンダー学会大会(2013年9月7日)「伝承文学における父親像と母親像」では、日本(服藤早苗「説話に見る父母像の変容 霊異記から今昔へ」、佐伯順子「御伽草子における父親像と母親像」、中国(中山文「中国『花木蘭』における父親像と母親像」、英国(鈴木万里「英国伝承バラッドにおける父親像と母親像」、ドイツ(野口芳子「『ドイツ伝説集』における父親像と母親像」)と各国の伝承文学の中の父母像が明らかにされる。野口は『ドイツ伝説集』全体に登場する父親と母親を抽出し、頻出する父母像を明らかにする。父親は母親より2倍も多く登場し、息子との関連において頻出し残酷である。教育するのは父親であり、子に絶対服従を課す。娘は他家へ嫁にやる商品として扱われる。母親は娘より息子との関係で頻出する。息子を呪い殺す母が多く、娘も息子も母に呪い殺される。ここには後継者育成に生死をかける中世の厳格な父母の姿が描かれている。野口の発表内容はジェンダー学会誌『日本ジェンダー研究』17号に論文として収録された。

日本独文学会大会(2013年9月29日)「グリム童話とドイツ伝承文学における父親像と母親像」は最も収穫が大きかったシンポジウムであった。溝井は「ハーメルンの笛吹き男」伝説を取り上げ、子どもの失踪を嘆く人物が、母親から父親に変えられていく過程を検証しながら家族像の変遷を明らかにする。竹原は各地に流布する「灰かぶり」の異型に注目し、民族や社会の相違による父母像の変容を近親姦の話を中心に調査分析する。山本は『少年の魔法の角笛』の詩を分析し、父母と子どもの関係に焦点を当てて考察する。金城ハウプトマンはドイツ語圏現代伝説に登場する父母像を分析することによって、現代ドイツが抱える家族問題が現代伝説に反映されているか否かを検証する。野口はグリム童話集211話全体を調査し、頻出する父親や母親について分析し、描かれているのは近代家族なのか、近代以前の家族なのかについて考察する。分析の結果、グリム童話やドイツ伝説集、民謡集に出現する父母像は、近代家族の父母像ではなく、近代以前の家族の父母像であることが判明する。なぜなら、子どもの教育担うのは母親ではなく父親であり、躾や教育を担当する母は、「子に尽くすことを責務とされ、母が家庭から出ることは子の生育を大きくゆがめる」というような近代家族の俗信が、グリム童話には見られないからである。教育を担うのは母親ではなく父親である。情緒的愛情に満ちた近代家族の

父母ではなく、後継者教育を施す中世の厳格な父母の姿が描かれているのである。

このシンポジウム発表は評価され、2014年に日本独文学会研究叢書102号『グリム童話とドイツ伝承文学における父親像と母親像』として出版された。

(2) 外国でのシンポジウム発表及び学术交流
グリム兄弟協会大会(2012年9月8日
ドイツ・カッセル)

野口が「グリム童話における7の数字 不吉な7の出現を巡って」(ドイツ語)というテーマで招待講演を行った。ディアナやアルテミスなどの豊穡の女神や太陰暦と結びついた7が、伝承文学では不吉な数として現れることをジェンダーの視点から論じる。

この学会ではロータス・ブルーム教授と研究交流することができた。また、ゲッテンゲン大学文化学研究所ではメルヒェン百科事典編纂者(ウタ 教授)や国際口承文芸学会会長(マルツォルフ教授)と意見交換することができた。

国際口承文芸学会(2013年6月28日
リトアニア・ピリニユス)

野口が「ヴィクトリア朝英国の影響を受けた日本のグリム童話」(英語)で、グリム童話の日本への導入は英語教科書や英訳本からの重訳によって行われ、ヴィクトリア朝英国の影響を色濃く受けたものであることを明らかにする。この学会で世界の著名なグリム研究者や口承文芸研究者と研究交流することができた。特にジェンダーの視点からの研究で知られるルース・ボティックハイマー(米国)との意見交換は有意義であった。ここでの発表が反響を得て、国際的学会誌“Fabula”に執筆を依頼され56号(7月刊行予定)に掲載される。

3) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

グリム童話やドイツ伝承文学をジェンダー学の視点からチームを組んで研究し分析する試みは、国内だけでなく国外でも初めての試みであろう。研究の結果、近代家族成立時代に編集されたグリム童話には近代家族よりも、中世家族の姿が色濃く残っていることが判明した。アメリカの学者の主張とは異なる研究結果には、国内外から驚きの目を向けられた。近代化されている部分は性的事項や結婚観のみで、父親像や母親像などの家族像には、近代の情緒的關係ではなく、中世の生産者としての厳格な関係が描きだされている。新聞記事になり、国際学会発表が国際学会誌掲載に決定したのは、研究結果が国内外にインパクトを与えたからであろう。

4) 今後の展望

グリム童話が日本や他の国々で出版されたとき、そこに加えられた改変に注目し、ジ

エンダー観を探る必要がある。ただし、英語訳からの重訳の場合、英語版で改変をまず把握する必要がある。今回の研究で明治初期の英語訳して関しては使用英語本を特定し、その改変を洗い出すことによって、日本で加えられた改変を明らかにすることができた。今後の研究では、現在出回っている絵本やアニメを調査することによって、どのようなジェンダー観を刷り込もうとしているのかを明らかにしていきたい。それによって現代社会や国が求めているジェンダー観を読み解くことができるからである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

野口芳子 Influences of the Victorian Values embedded in English Translations of Grimm's Fairy Tales upon Japanese Versions. Fabula Nr.56, 2015 (予定) 査読有

野口芳子 『ドイツ伝説集』における父親像と母親像 『日本ジェンダー研究』17号 2014, 13-24 査読有

野口芳子 白雪姫の固定観念を覆す 『日本ジェンダー研究』15号 2012, 27-41 査読有

〔学会発表〕(計 24 件)

金城ハウプトマン朱美 現代ドイツにおけるグリム童話 現代の語り手からの考察 日本独文学会 2014年5月24日 麗澤大学 千葉県柏市

野口芳子 Influences of the Victorian Values embedded in English Translations of Grimm's Fairy Tales upon Japanese Versions. International Society for Folk Narrative Research 2013年6月28日 ヴィリニウス大学 リトアニア

野口芳子 伝承文学における父親像と母親像 日本ジェンダー学会 2013年9月7日 武庫川女子大学 兵庫県西宮市

野口芳子 グリム童話全体における父親像と母親像 日本独文学会 2013年9月29日 北海道大学 北海道札幌市

溝井裕一 ハーメルンの笛吹き男伝説における父親像と母親像 日本独文学会 2013年9月29日 北海道大学 北海道札幌市

山本まり子 『少年の魔法の角笛』に基づく音楽作品における父親像と母親像 日本独文学会 2013年9月29日 北海道大学 北海道札幌市

竹原威滋 「灰かぶり・千枚皮」における父親像と母親像 東西の民間説話を巡って 日本独文学会 2013年9月29日 北海道大学 北海道札幌市

金城ハウプトマン朱美 ドイツ語圏現代伝説における父親像と母親像 日本独文学会 2013年9月29日 北海道大学 北海道札幌市

野口芳子 Zahl "Sieben" in den Grimmschen Maerchhen – Ueber das Vorkommen der ungluecklichen Sieben. Brueder Grimm Gesellschaft (招待講演) 2013年9月29日 グリム兄弟博物館 カッセル市、ドイツ

〔図書〕(計 15 件)

野口芳子 勉誠出版 『カラー図説 グリムへの扉』2015, 343(87-217)

溝井裕一 勉誠出版 『カラー図説 グリムへの扉』2015, 343 (157-184)

竹原威滋 勉誠出版 『カラー図説 グリムへの扉』2015, 343 (219-243, 291-307)

ベルンハルト・ラウアー 勉誠出版 『カラー図説 グリムへの扉』2015, 343(67-97, 247-258)

野口芳子 日本独文学会出版 『グリム童話とドイツ伝承文学における父親像と母親像』2014, 73(1-2,55-71)

溝井裕一 日本独文学会出版 『グリム童話とドイツ伝承文学における父親像と母親像』2014, 73(3-11,72-73)

山本まり子 日本独文学会出版 『グリム童話とドイツ伝承文学における父親像と母親像』2014, 73(29-40)

竹原威滋 日本独文学会出版 『グリム童話とドイツ伝承文学における父親像と母親像』2014, 73(15-28)

金城ハウプトマン朱美 日本独文学会出版 『グリム童話とドイツ伝承文学における父親像と母親像』2014, 73(41-54)

野口芳子 麻生出版 『グリムと民間伝承 東西民話研究の地平』2013, 575(34-60)

溝井裕一 麻生出版 『グリムと民間伝承 東西民話研究の地平』2013, 575(2-5, 166-198)

大野寿子 麻生出版 『グリムと民間伝承 東西民話研究の地平』2013, 74(34-60)

竹原威滋 麻生出版 『グリムと民間伝承 東西民話研究の地平』2013, 74(9-33)

金城ハウプトマン朱美 麻生出版 『グリムと民間伝承 東西民話研究の地平』2013, 74(227-265)

〔その他〕

新聞記事

(1) 神戸新聞で3回(2012年10月29日、31日、11月20日、朝刊23面) 武庫川女子大開催シンポジウムが記事になる。1回目はシンポジウム発表内容、2回目はラウアー博士の基調講演、3回目は野口芳子のグリム童話研究についての記事である。

(2) 読売新聞(2012年11月22日朝刊16面)で東洋大学開催シンポジウムが記事になる。

ホームページ等

<http://www.mukogawa-u.ac.jp/~noguchiy/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野口 芳子 (NOGUCHI, Yoshiko)
武庫川女子大学・文学部・教授
研究者番号 30164685

(2) 研究分担者

溝井 裕一 (MIZOI, Yuichi)
関西大学・文学部・准教授
研究者番号 60551322

山本 まり子 (YAMAMOTO, Mariko)
聖徳大学・音楽学部・教授
研究者番号 00383448

大野 寿子 (ONO, Hisako)
東洋大学・文学部・准教授
研究者番号 20394791

(3) 連携研究者

竹原 威滋 (TAKEHARA, Takeshige)
奈良教育大学・名誉教授

ベルンハルト・ラウアー (Lauer, Bernhart)
グリム兄弟博物館 館長

金城ハウプトマン 朱美
(KANESHIRO-HAUPTMANN, Akemi)
所属なし